論 文

株 虹

朝 倉 慶 吉

今我輩のこゝに語らむと欲する株虹なるものは神奈川県下にては三股(みつまた)とも稱することにして株虹とは木の伐り株より芽の發生したる狀に因みたるものなりと云ふ三股と云ふも其實三箇に限られたるにあらず海業者は曰く三股現出すれば一週間内には必ず多少の變化はあるものにして股の色の益々鮮明にして且其數多くして長く消えざる時は暴風の襲來は愈確實なりと云へり此現象は太陽の没する反對の側即ち南東の地平より上天に向ひ現はるゝものにして虹と云ふも虹にあらず全く Anti solar ray の現象なり横濱にては往々見ざるにあらずれども明治四十五年八月三十一日より九月一日に亘れる暴風雨前のもの最も顯著なりとす此時は數條の光は連日黄昏南東方に現出し其中一日だけは特に鮮麗を極め北西の地平より出でて天を亘り南東の地平に收斂し常には淡紅なれども此時は可なりの紅色を現したり此際中天雲ありとも思はれざる程なりき此現象は西方の地平に横はれる積雲の間より日光の漏れて空中の水蒸氣に映じ現出するものゝ如く薄き卷雲の浮べる際にも此光は現はるゝ様に見受けらる光の線數竝に其幅の廣狹は西方の地平に横はれる雲の變化に由るを以て觀望せる間に於ても常に變化するを見るものなり吾人は此現象に注意せしは大正九年以後にして昨年迄に十八回を觀望せり今之れを月別にすれば下の如しとす。

	七 月			八 月			九 月			合 計		
	微	弱	強	微	弱	強	微	弱	強	微	弱	強
大 正 九 年	2	1	1	0	0	0	0	0	0	2	1	1
十 年	0	1	0	2	0	0	1	0	0	3	1	0
十 一 年	0	3	0	0	2	2	3	0	0	3	4	2
合 計	2	5	1	2	2	2	4	1	0	8	6	3

以上の内大正十一年の七月に於ける三日は三日連日現れたるものにして八月の強度に現はれたるものも二日連續したるものゝ又九月に於ける微現象も隔日の現出なるを以て關係上は一回と見るも差支なきものなり斯くして算すれば其總數は三年間に十五回の現出に過ぎざることゝなる内其現象の濃厚なりしは大正九年七月に一日同十一年の八月に二日ありたり何れの時に於ても其現出せる際は高氣壓は

北海道より小笠原島方面にあるの間ならざるはなく只十一年九月のものは高氣壓は日本海より南海岸の沖に出づる間に現れたり而して低氣壓に至りては遠きは支那東海、琉球又は小笠原島方面、近きは日本海南海岸沖にある時にして其位置は甚だ區々なり又株虹の現出せる時間は短きは十三分、長きは四十二分にして總數十八回の平均は二十四分となる其現出せる際は雲量の少き場合多く午後六時の雲形を調査するに上層雲のみの時あり中層雲なる時あり下層雲の時あり上中下三種類の雜然たることあり其現出あるも海業者の言の如く暴風との相關は分明ならざるもの多く多少一週間内に兆候ありしと云へようかと思はるゝものは半數以下にして其風力とて概ね強風の範圍を超えず

以上の内其顯著なるものに就き之を見るに大正九年七月八日は高温にして高氣壓は小笠原島方面に横はり淺き低氣壓は支那東海にありしに過ぎずして數日後多少の風雨ありしのみ又十一年八月三十、三十一の兩日共株虹は鮮明なりしが此時高氣壓は北海道南東沖にありて颱風は琉球附近を掠め北西支那福建に入りし際にして當地にては數日の後南西の強風を觀測せるに過ぎず又其現象は薄かりしも琉球方面を颱風の經過せることあり大正十一年八月二十二日の如き同年九月十一日十三日十六日の如き是なり、以上の如く觀測の回數も少きを以て關係あるや否は猶明言するの域に達せずと雖も聊一斑を記するのみ

本件に就ては大正六年の本誌に翠君の蕪虹の記事あり同八年の本誌には小生の株虹の記事あり

Observation of “Kabunizi” or “Mitumata” (Anti-solar Rays)

by Keikit ASAKURA

Kabunizi is usually observed standing on the horizon opposite to the sun at sunset. It is merely a phenomenon caused by the scattering of beams of light in air when they are projected into, through the openings between cumulus clouds on the western horizon at sunset. Seamen often regard it as an omen of coming storms. The author observed it with special interest since 1920.

As far as the author observed, the phenomenon appears in July, August and

September only, It is not certain that it can be regarded as an omen of storm The phenomenon was rather short in duration and usually disappears after half an hour or so.

報 告

高知の風に就いて

赤 松 貞 實

Wind at Kōti

by S. AKAMATU

高知の風の變な事に就ては度々質問せられるので其の都度私達は夫れが地勢の關係であることを述べて置いたが併し是に關する具體的の調査は未だした事はなかつた、然るに或る動機から一寸調査したい事情が起つたので、出張の折などは其の附近の人々に質し又時には山に登りて市及附近に立つ煤煙や低霧の漂ふ有様や旗の靡く方向などを觀察して之れが原因の探究を試みた。御承知の如く本縣は南に海洋を控へて居るので沿海地では常に海陸風が流行し殊に河川のある地方では陸風が發達する之れは云ふ迄もなく山間で冷えた空氣が狹溢な河川から吹き出す爲めで本縣の如き海岸近くに迄山脈の連亘せる所や長い溪谷を有する地方では常に見受けられる現象で當所の風も亦此邊に原因して居る様に思はれる。そこで當所の風を論ずるは先づ附近の地形に就て其の大要を述べて置かなければならん、當市附近はもと浦戸灣の一部であつた（紀貫之の土佐日記參照）が鏡川及國府川等の吐き出す土砂の沖積して陸地となつた所で高知市は鏡川のデルタ（Delta）である、即地形は西に狭く、東に開けたV型をなした所で市附近では南北僅かに四千五六百米にして北には標高三百米以上の山脈が略南西から北東に走り、南は鷲尾（三百十米）及烏帽子山（三百六十米）の二山を最高峯として東西に延び鷲尾山からは小石木（百六十一米）及筆山（百十九米）の支脈が南西より突出して市に逼り近く小高坂山（六十米）と相對して一つの頸部を形成し、當所は恰度此中央なる大高坂城趾（四十米）の二の丸にある。而して西方は枝川及八田の二つのパス（Path）により仁淀川と通し、鏡川は北方の山間を迂迴して北西より市の南端に沿ふて東浦戸灣に注いで居る。

地形如斯を以て當地に流行する陸風は鏡川及仁淀川の二溪谷より吹き出す風の、